

より良き医療を患者さんに還元することを目指して

昭和大学医学部 内科学講座 呼吸器・アレルギー内科学部門

教授/昭和大学病院 病院長
相良 博典 先生

1987年 獨協医科大学医学部医学科 卒業
1995年 英国サザンプトン大学 免疫薬理部門留学
2009年 獨協医科大学越谷病院 呼吸器内科 主任教授
2013年 昭和大学 呼吸器・アレルギー内科 主任教授
2017年 昭和大学病院 内科学講座 講座主任、
副院長 兼任(2020年 病院長 兼任)



助教
平井 邦朗 先生

2011年 昭和大学医学部医学科 卒業
同 年 国立国際医療研究センター 初期研修
2013年 昭和大学医学部 呼吸器・アレルギー内科
2014年 山梨赤十字病院 呼吸器内科
2015年 昭和大学医学部 内科学講座
呼吸器・アレルギー内科学部門 助教



昭和大学医学部内科学講座の歴史は、1928年の昭和大学の創立時に、同学の創立者である上條秀介先生が開設された内科学教室に遡る。その後の変遷を経て改組された呼吸器・アレルギー内科は相良博典教授が2013年に第7代の教授に就任され、教室のさらなる発展に取り組んでおられる。気管支喘息・COPDをご専門とされながらも、幅広く多くの経験を積むことが必要とお考えの先生は漢方治療も積極的に取り入れられ、今般、COPDに合併するフレイルに対する人参養栄湯の有用性を報告された。そこで本稿では、本研究の推進者でもある平井邦朗先生とともに、漢方治療の重要性についてご紹介いただいた。

多くの症例を経験し、幅広く研鑽を積んでほしい

相良 当科は呼吸器・アレルギーの幅広い領域を専門としており、診療対象となる疾患は多岐にわたります。私の専門は喘息、COPDですが、医局が教授の専門とする疾患ばかりに目が向いてしまうことは、決して好ましいことではありません。医局のスタッフには、呼吸器・アレルギー内科をベースに幅広く研鑽を積んでもらいながら、さらにサブスペシャリティーとして個々の興味がある部分を伸ばしてほしいと考えています。

われわれは臨床家として患者さんの診療を最優先に考える必要があります。もちろん基礎研究も重要ですが、単に興味本位の基礎研究に没頭するのではなく、医療に貢献できるトランスレーショナルリサーチを目指しています。目の前の患者さんにとって何が必要で何が欠けているのかを見極め、そこに到達するための基礎研究は重要であり、そのためには臨床現場でいろいろな経験を積み重ねることで、その疾患の神髄がわかるのではないかと考えています。

私が教授に就任後、多くのスタッフが入局し、現在は活気あふれる医局として着実に発展していることを実感しています。その成果の一つが、私が会頭を務めた第68回日本アレルギー学会学術大会(2019年6月14日~16日)です。当科の登録演題は65題と記録的な演題数であった

だけでなく、学会の参加人数も過去最高を記録するなど大成功を収めることができたことは、医局スタッフの協力の賜物と感謝しています。

平井 当科では“患者ファースト”という教授のスタンスが色濃く浸透しています。何よりも臨床に熱い教授であり、しかもご自身の専門領域にとどまらず、幅広い知識を常にアップデートされ、スペシャリストとジェネラリストの両面を持つことが、目の前の患者さんを疎かにしてはいけない、という姿勢を体現されていると感じています。

また、当科の良いところの一つは、派閥やグループがないことです。それぞれの医局員が切磋琢磨しながらも垣根がないため、臨床面でも研究面でもとても仕事がしやすい医局です。

相良 私が卒業後に入局した呼吸器・アレルギー内科は、当時、東京大学の旧物療内科学講座出身のスタッフで構成され、疾患ごとのグループでの良い意味での競い合いがありました。私自身がその中で幅広い知識と臨床能力を習得することができた経験から、医局スタッフにもより多くの症例を経験し、幅広く研鑽を積んでほしいと思っています。

人参養栄湯はフレイルを合併するCOPD患者さんの福音に

相良 私が漢方薬を使用するようになったきっかけは、好

酸球性炎症が強く難治性の気管支喘息の患者さんに処方した柴朴湯でした。経口ステロイド薬の使用を考えていた患者さんでしたが、牧野莊平先生(現・獨協医科大学名誉教授)に勧められた柴朴湯を使用したところ、好酸球数が低下し、症状も改善しました。現在では、咳嗽の改善効果を期待して、患者さんの症状や病態にあわせて麦門冬湯や清肺湯、小青竜湯、麻杏甘石湯といった漢方薬を使い分けるなど、漢方薬を積極的に使用しています。医局スタッフには、漢方薬の積極的な使用は推奨していませんが、西洋薬だけではコントロールが難しいような場合に漢方薬の使用を勧めることもあります。

最近、COPD患者さんのフレイルに対する人参養栄湯の有用性に関する研究を平井先生が中心になって進めてくれましたが、その成果によってCOPD診療における幅がさらに広がったと思っています。

平井 高齢のCOPD患者さんで“何となく弱ってきた”というような問題を抱えている方は非常に多くいらっしゃいます。もちろん、そのような状態に至る背景を精査して介入方法を見つけていくのですが、フレイルに対しては次の手がないという状態でした。しかし、人参養栄湯という有力な次の一手があることは、患者さんやご家族はもちろんのこと、医療者にとっても大きな福音となります。

私が症例報告をさせていただいた患者さんは、待合室から診察室に入るまでの間も苦しそうで、そろそろ在宅医療への移行が必要と考えるような方でした。ところが、人参養栄湯の服用を始めてから状態が劇的に改善しました。また、フレイル/プレフレイルのCOPD患者を人参養栄湯投与群と非投与群に割り付けて比較検討したところ、CATスコアなどが有意に改善しました。プラセボ対照比較試験や患者さんの「証」を考慮した研究の必要性などの課題はあるものの、人参養栄湯はフレイルを合併するCOPD患者さんに対する有力な介入方法であり、COPDに限らずフレイルの患者さんにとって大きな福音になると思っています*。

医療現場における漢方薬の重要性は高まっている

相良 かつて漢方薬には、西洋薬による治療に手詰まりのときの選択肢という印象がありました。しかし、現在では第一選択薬として使用するケースも多くなりますし、併用療法において補完的な役割を担うというように、医療現

場における漢方薬の重要性は高まっています。

平井先生がまとめた報告に、非常に興味を持たれている呼吸器専門医が多くいらっしゃることを耳にしています。今後ますますCOPD患者さんのフレイルに人参養栄湯が広く処方されるようになると思いますし、人参養栄湯だけでなく多くの漢方薬が臨床現場で有用な治療選択肢として重要視されると思っています。

平井 漢方に対する敷居は低くなったように感じます。私は毎週訪問診療をさせていただいているのですが、活動性と食事摂取量が低下した患者さんに“人参養栄湯はこの患者さんに使えませんか?”という看護師さんからの提言を受けることもあるほどです。おそらく、現場の感覚として著効したイメージがあったのだと思います。今後さらなるエビデンスの構築ができれば、普段漢方薬を処方していない医師が自信を持って処方できるようになると思います。

呼吸器・アレルギー内科領域の発展に向けて

相良 当科は、呼吸器・アレルギー内科領域のトップレベルの人材が揃っています。私は、医局スタッフが強固に連携し、さらに良き臨床医として、良き研究者として成長できるような環境づくりを進め、医局のさらなるレベルアップに尽力したいと考えています。

※詳細については、小誌p.3~p.8をご参照ください。



呼吸器・アレルギー内科学部門の皆さん(相良博典先生ご提供)

取材：株式会社メディカルパブリッシャー 編集部 写真：山下裕之